

Popular JSCAを目指す 構造家・森高英夫

朝倉幸子◎TH-1

illustration: Taco◎Switch・エンタテインメント

■Construction Record

安井建築設計事務所の東京事務所で構造を率いる森高英夫さんは、今年JSCA(日本建築構造技術者協会)の会長2期目に就任。目標は、会員の増強、性能設計の普及、木造構造設計の向上、既存建築物安全・安心の支援などなど、着実に推し進める。覇志堂は、木造構造に視点を置いていることに着目して話も弾む。

神戸大学建築学科で学部から大学院まで過ごした大阪出身。2004年まで安井建築設計事務所大阪本社勤務。20代で自信作のサントリー利根川ブルワリー、広島市庁舎、神戸ハーバーランドなどランドマーク的な建築が多い。鹿児島空港国内線旅客ターミナルビル増築工事では、粘性制振壁の配置で既存フレームを補強する工法を実施。那覇空港国内線旅客ターミナルはプレキャストの屋根が特徴。湊町リバープレイスは交差している高速道路の真ん中に建つ工夫の建築物。FM大阪アンテナ塔がそびえ、スタンディングホールを内蔵している。

「大阪最後が、入社初めて担当した大阪ステーションシティ増築工事(アクティ大阪)なのも、奇遇」と。組織設計事務所の特徴を活かして構造と意匠が旨く噛み合った建築で、JSCA賞やPC技術協会賞などの受賞も多数です。

12年前の2005年に、森高さんが描く人生計画にはなかったはずの、東京事務所転勤となります。執行役員は構造のトップとしてエンジニアだけをやってはいられない。マネジメントの日々だが、「東京に来てよかったと思います」。サントリーをはじ

め、本社移転してきたクライアントもあって、人とも仕事ともかけがえのない実りの月日だったから。

■Scale Sensitivity

EXPO70を見て、丹下か黒川になるぞと思ったのは、絵を描くのが得意との関係があったからかも。親の希望する医者道から進路変更して、神戸大学では山田稔研究室へ。鉄筋を組み自分で調合したコンクリートを流し引っ張るなどの実験と研究。それが阪神・淡路大震災跡を見たときの判断に通じたといいます。山田教授からは、世界に通じるために論文は英語で書くほうが良いとアドバイスも受けた。大学院の時に、世界地震工学会議に投稿論文がアクセプトされてニューデリーで発表したほどになった。その後も、仕事をしながら国際会議での論文発表は9回。

新入社員の育成は自分の信念を実践。その一つが1年間は手計算中心に仕事をさせること。森高さん時代の黄色いトレペでプレゼンとはいかないが、スケッチもさせている。貼り付けだけのCAD製図も許さない。自身が重量感やスケール感を重んじるから「リアリティを大事にするエンジニアを育てたい」。

■Andy Williams

論文と研究発表ができる程の英語力はどのように?……「中学生の頃から大のポピュラー音楽ファンなので」と。プレスリー、カーペンターズ、そしてアンディ・ウィリアムスが先生だった森高さんのナイスな歌声を英語習得に生かしたとは。

が、絶対的に自信があった英語で大学入学後、挫折も味わったと明すし、克服した病の話も「運がよかった」とニコヤカに話す。関西人の気質プラスポジティブ思考の森高英夫さんの一面を知る。40代から50代にはフルマラソン、昨今はゴルフが好きなのは戦略が大事だからとか。

野球に例えて、「全員が4番バッターになる必要はない」、個々の力と成長がチームをより大きくしていくのだからと若い社員に言う。JSCAで掲げた「国際交流推進」も、新しい切り口で深めていくはずの森高会長なのです。

